

わたしの戦争体験

宗像郡福岡町 塚 豊三郎

私は昭和13年1月歩兵第29連隊歩兵砲中隊（会津若松）に入隊以来、敗戦の翌年5月鹿児島港に上陸復員まで、8年5ヶ月の間戦争に参加した。徐州会戦、ノモンハン事件、ジャワ攻略戦、ガダルカナル全滅戦、ビルマ断作戦、仏印明号作戦などの戦場で、常に最前線の戦闘に参加した無学の一兵士であった。そして数少ない奇跡の生還者である。今回、ほんの一こまの実相を私の所有する資料を基に綴ってみた。

徐州会戦では昭和13年5月に速射砲（対戦車37mm砲）初年兵四番砲手として参加した。応急派兵が下令され、満州（現在、中国東北地方）ハルピンから貨車に我が部隊は挽馬と一緒に積み込まれ、華中王武廟近くの駅につくと直ちに行軍に移された。砂塵濛々として身体中砂だらけになり、2日目頃から体力も消耗してきた。落伍しようものなら初年兵など置き去りにされる。そんな状況の中で私は必死になって挽馬にぶら下がりながら歩いた。馬は私の命の綱であった。敵の死骸が丸太ん棒のようになってあちこちに転がり、人間特有の死臭が鼻を突く。銃声が聞こえてくると兵は精神異常者に変貌してゆくのである。私は早く戦闘が始まり敵の弾に当たって死んだ方が楽になるとさえ思った。

夕刻集落に着くと食事の準備だ。「本日の食料は現地調達」の命令が出ると、初年兵は民家を片っ端から家探しにかかる。家の中には何も見当たらないことが分かったと外に出る。畑の中にアンペラで囲んだ麦の山を見つけ、銃剣で突き破る。中には鶏卵、食塩、野菜までも隠されている。子豚を殺し、鶏を捕まえ、食べられるものは全て略奪をする。それが兵の重要な任務であった。

この戦闘で多くの戦友が死んだ。死体を薪の上に積み重ね、石油を掛けて茶毘に付した。もう誰の骨か解からない。悲しくもなければ涙もでない。無神経となる。初年兵はただ黙々と上官の命令に従うだけである。次第に精神錯乱者殺人集団と化してゆく。これが戦場の悲劇である。

ノモンハン事件（国境事変）では速射砲分隊長として参加した。私達は急遽満州牡丹江から派兵され、最前線アブダラ湖付近に着いたのが昭和14年8月26日であった。ソ連軍陣地から3km程のところに、タコツボ（一人一穴）を掘って待時していた時のことである。空中戦が始まった。両軍10機程が入り乱れての戦いである。ところが白煙を引いて墜落するのは日の丸の付いた友軍機だけであった。「これは大変だ。ソ連の戦闘機の性能の方が優秀ではないのか」と小隊長と話し合ったことを覚えている。次の日ソ連軍の夜襲を受ける。撃退に成功したが、歩兵小隊は殆ど全滅となった。9月16日停戦となり命拾いをした。この戦闘は近代戦であり、ソ連軍重戦車等の攻撃により完敗したにも拘わらず、軍はその真相を隠蔽圧殺し近代戦に対する改善対策を怠り、三八式歩兵銃による突撃主義によって兵を牛馬虫けらの如く取扱い、

首脳は統帥権を振りかざし、無謀な侵略戦争へと突入していったことが悔やまれてならない。

ガダルカナル全滅戦では速射砲中隊指揮班付下士官として参加した。この戦闘こそ言語に絶する残酷なものであった。ゆえに、私は復員後も遺族の方々にその真実を語ることを憚りながら生きてきた。私達が「ガ島」に上陸したのが昭和17年10月6日夜であった。飛行場総攻撃の日取りは23日と設定される。地形も敵情も不明のままジャングル迂回作戦の命令が伝達された。上陸兵員は中隊長以下57名、砲4門、爆薬400発、その他器材である。通常は挽馬2頭をもって搬送することになっているのに挽馬の全てをラバウル島に残置してきたのである。ここに悲劇が待っていた。砲は分解搬送、全てを担いで運ばねばならない。しかも迂回路は30km以上のジャングルである。これは無茶だ、無謀だと言っても命令である。総攻撃日まで『17日間食糧半定量とすべし』、上陸時の食糧は10日分であった。半定量ではとても砲は担げない。20日頃から兵は動けなくなった。ジャングルはまた巨木や岩石が多く、砲の前進を阻む。余りにも苛酷な命令である。総攻撃は24日に延期されたがそれでも総攻撃の展開線に到着できず、3km後方の谷間で夜が明けてしまった。指揮班だけで前進したが敵の重砲撃にあい、私と3名の兵が負傷してしまった。連隊の夜襲はアメリカ軍の重火器の前に屍の山となった。三八式歩兵銃突撃は完全に失敗したのである。アメリカ軍を侮り、無謀な突撃を繰り返したのは時の指揮官の誤りではなかったかと思う。

その後負傷者の搬送もまた悲惨だった。後退命令が出てマ馬拉川付近に露営を始めたのが11月26日である。この頃から特に食糧補給が少なくなり、私達は食べられそうな雑草、蛇、蜥蜴、何でも喰った。兵は段々と餓鬼と化していった。糧秣受領に派遣された3人の兵のうち1人が帰らない。「途中射殺されました」との報告である。もはや「軍隊」は破滅したのである。薬品は皆無となった。マラリア熱にかかると40度以上の熱に皆苦しんだ。それに下痢（赤痢）が重なると急激に衰弱し、寝たきりとなる。そして蠅は人の死期を知っているかのように人々の周りに集まってくる。そして仲間は静かに死んでゆく。12月に入ったら毎日一人一人と死んでいった。初めのうちは穴を掘って埋められたがそれもできなくなる。放っておくしかない。死臭など麻痺してしまう。米がほしい。しかし兵には届かない。生き地獄だ。『神様明日は私の番ですか』と問いかけては諦めていた。私はマラリア三日熱にかかり、3日毎に悪寒がやってきた。その間ふるえが1時間程続きやがて熱が下がり、少しは動くことができた。下痢をしなかったのが私の助かった原因かもしれない。

1月に入ってから戦友はばたばたと死んで逝き、中隊長以下5名となってしまった。撤退作戦など知る由もなかったが、昭和18年2月1日、私はどこをどう歩いたか記憶に定かではないが、戦友紺野軍曹に助けられ、駆逐艦で「ボーゲンビル島」に上陸することができた。骸骨のように痩せ細り、声も出せない敗残兵だったのである。後日転送されマニラ第12陸軍病院で計量したときの体重が35kgであったことは今でも忘れられない。ガ島撤退者は速射砲中隊57名中5名となった。連隊2450名中撤退者は250名、残りの2200名は残らずガダルカナル島の土となったのである。痛恨の極みである。更にインパサールの悲劇、ビルマの

悲劇を重ね、ついにサイゴンで敗戦を迎えた。

戦争とは人が人を殺戮しあうことであり、如何なる倫理があろうと私は否定する。戦後50年経った。この戦争は一体何だったのか。歴史的に正しく検証し、再び過ちを繰り返してはならない。特にこの戦争で300万人以上の尊い命が失われた。これら事実が、国民全体が帝国主義という大きな幻影に誘導され、引き起こされたことも忘れないで欲しいと思う。